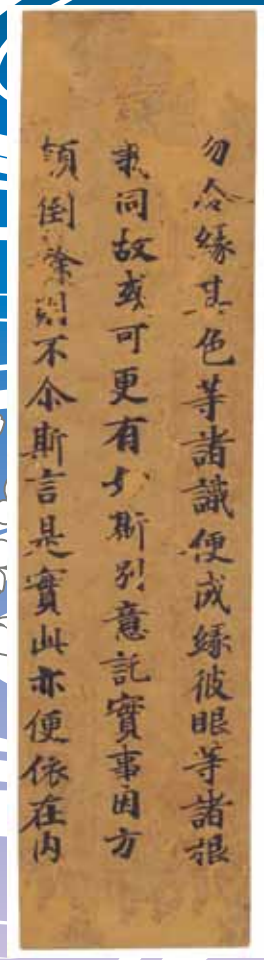
龍神楊貴妃伝 より

南山・熊野の犬飼と稲荷神、難陀竜王

蓑虫

Vol. 2



©蓑虫工房

はじめに

この小冊子は、筆者の想像している龍神村の楊貴妃渡来仮説である「龍神楊貴妃伝」の一部を、抜粋し再編した第二集です。

先に、発刊した第一集「熊野楊貴妃信仰説」は、多くの方々の賛同を集め、今まで、龍神楊貴妃伝に関心を持っていなかった方々にも、「龍神楊貴妃伝」に興味を持っていただく事が出来ました。

おそらく、前回のお話で、理論的に考える事の出来る方であれば、熊野信仰が楊貴妃信仰である事について、お考えいただけたでしょう。しかし、前回は、「熊野信仰が楊貴妃信仰である。」と、ほぼ証明できたにすぎません。お話を聞くと、どうも、それだけが私の主張している事だと勘違いされている方もいらっしゃるようです。そこで、今回は、この楊貴妃信仰が、「熊野」から、さらに「高野山」「伏見稲荷」「田辺」「龍神村」にまで繋がっている事をしめします。

第一集と同じく、前半は本編、後半は資料集です。今回は、この紀州のさまざまな地域の古い文献や伝承に出て来る或る老人を主人公にします。第一集と同じように、本編だけを読んでいただければ、私のお話したいことは述べられていて、また、出て来るお話は、その地域の人々にとっては、当たり前の有名なものなのですが、それを全て把握している方は、少ないと思います。

わからないお話が出てきましたら、どうか後半資料をご参照ください。

その上で、私の仮説が妥当なものであるかどうか御検討いただけましたら幸いです。

２０１６年　吉日　筆者敬白

製作　蓑虫工房
和歌山県田辺市龍神村小家 972-36 アトリエ龍神の家２C
電話・ファックス 050-3444-4776 Email:minomusi@ztv.ne.jp

龍神楊貴妃伝　http://www.minomusi.net/youkihi/
龍神村楊貴妃伝説（フェイスブック）
https://www.facebook.com/ryujinyoukihi

解説４　空海と龍神温泉について

古は役の小角中の峰修業の時始て泉地を開き弘仁中僧空海高野山に入り難陀竜王の夢告に因りて衆庶の来浴を導き醫王の像を自鐫して草堂に安置す此擧龍王の告る所なるを以て龍神温泉と稱し即ち村名と為す

日本鉱泉誌３巻中、明治１９年（１８８６）出版より抜粋

『里伝』及び『龍神という事　同湯の事』の古文書（原文注釈）によると、

・・・・いよいよ川下へ御越あり候。しかるところに、何くれとなくして八旬気（八月と思われる）成、老人一人来りて遍照（大師）に会奉り、大師は問うて曰、

「老人はいずくより来た」

と、御尋ねありければ答えて、龍神より来るといへり。此の地を龍神と名づけ教え成候。此の湯はいかなる所より来たと御不審あれば、老人曰娑婆世界の衆生をたすけんために、龍宮よりあがり給うと答ありけり。大師大いによろこび給ひて、薬師如来を御仏作り給い、彼の人（老人）にお渡しあり、即ち神湯寺と名づけ給う・・・（以下略）

「龍神村誌下巻第３偏神祇宗教誌　第５章　仏教　第３章　龍神村の寺院　龍神山温泉寺」「由緒沿革」から抜粋

「龍神村誌」は、「稲荷大明神流記／資料７」の記述を紹介した後、「高山寺由緒も、嵯峨天皇の弘仁七年（八一六）すなわち、高野山金剛峰寺が創設された年の八月、異様な老人との遭遇が寺伝にあり、しかも宮中参内を許可された真雅和尚の『稲荷明神記』であれば、高山寺も弘法大師の巡錫を物語っているのである。一方、温泉寺の古文書も弘仁年間の八月ころ遍照（大師）が老人と遭遇していることは、前述のとおりである。したがって高山寺も温泉寺も、大師にまつわる由緒は否定できないであろう。」としており、「龍神村誌」の筆者も、「田辺の稲荷神」、「高野山の元となった犬飼」、「龍神温泉の難陀竜王」を同一と見ている事がわかる。

目次

本編

熊野の稲荷・狐信仰・・・・

本編

南山・熊野の犬飼と稲荷神、難陀竜王

最澄の天台宗を継いだ円珍だが・・・円珍は、空海の甥（又は、姪の息子）でもあり、唐の国に渡った時、開元寺の恵灌から「五筆和尚（空海）は健在か?」と訪ねられたエピソードが園城寺の資料に残されている。また、記録には、円珍が、楊貴妃の伝記、「長恨歌」を書いた白居易の墓を訪れた事も書かれている。円珍の開いた天台宗寺門派から、初代の熊野検校である増誉が出ており、円珍の産んだ天台宗寺門派が神仏習合の熊野信仰の基礎を作った事は疑いない。

解説3　今熊野観音寺の縁起について

『平安の昔、弘法大師空海上人が唐の国から帰国されてほどなくの頃、東寺において真言密教の秘法を修法されていたとき、東山の山中に光明がさし瑞雲棚引いているのを見られました。

不思議に思われてその方へ慕い行かれると、その山中に白髪の一老翁が姿を現わされ、「この山に一寸八分の観世音がましますが、これは天照大神の御作で、衆生済度のためにこの地に来現されたのである。ここに一宇を構えて観世音をまつり、末世の衆生を利益し救済されよ。」と語りかけられ、またそのときに一寸八分の十一面観世音菩薩像と、一夥の宝印を大師に与えられました。この時に老翁が立ち去ろうとされたので何びとかをたずねると、「自分は熊野の権現で、永くこの地の守護神になるであろう。」と告げられて姿を消されました。

大師は熊野権現のお告げのままに一堂を建立され、みずから一尺八寸の十一面観世音菩薩像を刻まれ、授かった一寸八分の像を体内仏として納め、奉安されたのが当山のはじまりです。』

今熊野観音寺のオフィシャルサイトから縁起抜粋

今熊野観音寺は、開設当初は。東山観音寺という名前であったが、熊野崇拝を行なった後白河法皇の崇敬を厚め、後白河法皇は、山麓に「新熊野神社」を創設すると共に、観音寺を、その本地仏を祀る寺として「今熊野観音寺」と改称された。

小翁弓を持ちて追い来り、羽車の前につくばう。皆問う、答えていわく、我が名は万歳、大河の辺り尾翼の丘、大柳ここに有り、常に病い治むるを事とし、導き奉らんとして、先駆けして河辺に着くと、これより丸手船に乗せ奉る

解説　筆者は原文を見ておらず、本文は「熊野誌２８号」に掲載された「花の窟にみる熊野信仰の源流」という前川照世氏の文章から転載した。元文は、漢文であるという。元文には、崇神天皇の御代と記載されているとの事だが、本文には、後白河法皇が信仰したといわれる大柳の逸話が掲載されており、筆者は、文が崇神天皇の御代まで遡ることはないと考える。

解説１　王子の狐について

東京北区の王子稲荷神社には、王子の狐火が三十三ケ国から集まったという民話伝承、あるいは、関八州から狐火が集まるという伝承があり、この最も古い資料は、寛永期に徳川家光の命により作られた『若一王子縁起』という王子神社の縁起絵巻に掲載されている。

王子神社の創建年は不明とされるが、文保（１３１７年－１３１９年）および元弘（１３３１年－１３３４年）年間に、当地の領主豊島氏が社殿を再興し、熊野新宮の浜王子より「若一王子宮」を改めて勧請・奉斎、王子神社となったものである。王子稲荷神社は、この王子神社の摂社である。

解説２　智証大師・円珍について

円珍智証大師は、第五代天台座主であり、唐の国で仏教を学んだ入唐八家の一人で、役行者の後継者を目指し、大峰山や熊野など修験道の発達に寄与し、後に滋賀県にある三井寺（園城寺）を伝法灌頂の場として天台宗寺門派の開祖となった。

「三枚月を祀った熊野の犬飼・千代定」
「稲葉根王子で円珍と出会った稲荷神」
「空海と田辺で出会い伏見稲荷の起源を作った稲荷神」
「空海に三鈷の行方を伝えた南山の犬飼・狩場明神」
「京都・東山で空海に天照大神の手彫りの観音像を授けた今熊野観音寺の熊野権現」
「神島から龍神山に向かって神光を引き連れて昇って行った龍神・大己貴命」
「空海に温泉を伝えた龍神村の難陀竜王」

私は、これから伝説の分析を行い、逸話が全て同じ人物の物語である事を証明していきます。そして、これらのお話が関連するものである事を理解していただけるなら、楊貴妃と、この人物との間の知られざる物語が浮かんでくるはずです。

熊野の稲荷・狐信仰

熊野が稲荷（狐）信仰と結びついている事は、第１集「熊野楊貴妃信仰説」の中でも新宮阿須賀神社や奥熊野玉置神社の例をあげて述べましたが、一般的には知られていません。そこで、本題に入る前に、もう少し、具体例をあげて狐と熊野の関係を証明しましょう。

貴族達の通った熊野街道に列なる王子の幾つかは、古くから、狐や稲荷と結びついています。まず、安倍晴明の母、信太狐の伝説のある大阪阿倍野の信太明神・阿部王子神社、和歌山に入ると最古の稲荷神社と言われる糸我稲荷神社・糸我王子、伏見稲荷の元となったとされる田辺の伊作田稲荷、

中辺路に入ると、いまは稲荷社はありませんが、稲葉根王子・稲葉根稲荷、船玉神社・玉姫稲荷・・・全国的に稲荷社はどこにでも建っています。古道沿いのあちこちに稲荷社があっても何の疑問も感じないかもしれません。

稲荷神は、幕府の庇護の元、商売繁盛の神として江戸時代に大流行しました。全国各地の稲荷社は、だいたい、その時に建てられたものです。

しかし、熊野の稲荷社は、その起源がわからないほど古いものばかりなのです。

その稲荷信仰が大流行した江戸、東京に眼を移せば、その稲荷信仰の大本である東京北区の王子神社は、熊野新宮の浜王子から若一王子を勧請したものと伝わり、この王子稲荷神社が、関東八州の稲荷（狐）を束ねているという伝承があります。（解説1　王子の狐について）

熊野信仰が稲荷（狐）信仰と結びついている最大の証拠は、貴族達の熊野参詣の流行時、熊野に参詣した貴族達は、伏見稲荷に参拝し護法童子をお返しする風習があった事です。この事は、私がざっと捜しただけでも、「為房卿記」、「中右記」、「熊野道之間愚記」「修明門院熊野御幸記」に見られ、熊野参詣が稲荷詣とでセットで行なわれていた事がわかります。（資料1「為房卿記」、「中右記」、「熊野道之間愚記」、「修明門院熊野御幸記」抜粋）

このように、熊野信仰が稲荷（狐）信仰と深く結びついている事は、完全に証明される間違いないことなのです。

広重画「王子の狐火」

解説「熊野権現秘事の巻」は、田辺の闘雞神社の縁起として伝わるもの。本文は「くまの文庫2　熊野中辺路伝説（上）」に写真が掲載されていたものから意訳した。本願別当極楽寺大福院蔵のものであるという。

資料 10「熊野山略紀」抜粋

滝宮　飛龍権現、成劫初起之時、与滝水共降来、難陀龍王化現也、慈恵僧正八彼神示現応作之所変也、当山籠飛龍権現正躰可奉拝之由、祈之、即自滝底大龍出テテ登滝上、其足裏ニ銘良源、其後帰敬慈恵僧正云々、

滝の宮　飛龍権現、初めて起こりし時、滝に水を与え共に降り来った。難陀竜王の化現したものである。慈恵僧正は彼の神の示し現われたる所の変化なり。僧正は、当山に籠もり、飛龍権現の正体が可の由、奉じ拝む。この折、すなわち滝の底から大龍が出でて滝の上に登った。この足の裏に良源の銘があり、その後、帰敬して慈恵僧正になったと伝わる。

解説『熊野山略記』は熊野三山それぞれの成り立ちや祭礼の内容などを説明した縁起集成で、熊野三巻書とも呼ばれる。熊野那智大社で、永享2年（1430）に書写した事を示す奥書のついた「熊野山略記」が見つかり、原本の成立が中世にさかのぼることが明らかとなった。　※良源（912～985）、第18代天台座主、慈恵僧正・慈恵大師は良源の諡号

資料 11「熊野伝記」・「本宮社記」一部

また詔ありて千代挟田命は、五人の神部、天女、三人の織女、また二人を先 に立てて天降り坐し、有馬村の神器、種々の財物を天羽車に移し、神部等あいともに迎え奉り、大斎原に移す。時に老女、櫛を奉りて申す、また帰り給いそ、その所を櫛屋と名づく。また坂木を奉り祝う、その所を神木と名づく。すでに坂を越えて羽車居る、その所を尾呂志村、あるいは宝殿と名づく。彼の地に行き鹿を射し村、ここに泊まる。これより先、

権現宮の縁起ならびに秘事

紀州牟呂郡田辺庄に権現宮が御鎮座しています。

神代の昔、海龍王が山に現れ、加四磨と称す一島の北の海中の浦の磯からは、神光が、漏れ出して、辺り一面を輝かせました。そこに、岩の名を神楽岩、村名を神子浜村という浜がある村があります。

神光が現れ、海龍王が山に向かわれた時、天女が村に降り、楽器を奏し、舞ったので、村の名を神子浜と呼ぶようになりました。また、波が岩に打ち寄せるとき、岩が自然と琴や鼓の音を放ちました。そこで神楽岩といいます。

龍王は忽然と海から浮かぶと、燈を捧げて山に向かいました。龍王は、そこに草を結んで、假の金殿を作りました。そこで彼の山の名を假庵山といいます。

神龍が、柏手を打って、光に此の所は清浄です。影向してください。と言い終わると、一円の神光は、此の山はとどまる事は可能ですが、三元の神妙を得る事は出来ません。もう少し検討してくださいませんかと言いました。

そこで神龍は神光を假庵山にとどめた上で、海中からは測る事の出来なかった秋津野の山に住居を求めました。この嶮山を号して龍仙といいます。そこで山から貝空が出てきます。この時、神龍は大己貴命尊となって顕われ、天の羽車に乗って虚空の山麓に上りました。神光からは雲が起こり、（そこで此の所を雲の森といいます。）共に天の羽車で龍仙の頂きに向かったと云います。今、龍仙にある宮が是だそうです。

天武天皇13年6月　干支　甲申

十二殿を構えて　始祭に奉崇する　天神地祇（天の神、地の神）

神祇式の口伝

熊野の犬飼・千代定

データ

「熊野の犬飼」

「石田川の畔の住人」

「三枚月・熊野権現、三狐神（女性・稲荷神）の庇護者」

「三枚月・熊野権現は、中国（天台山）から渡ってきた」

熊野の犬飼・千代定は、熊野縁起に関する最古の文献である「熊野権現垂迹縁起」に登場します。（資料2「長寛勘文」より「熊野権現垂迹縁起」）

石田川の畔に住む犬飼、千代定は、大猪を追いかけ、熊野大斎原に入り、三枚の月を見つけて、ここに社殿を創ったとされるのですが、この千代定は、さらに、奥熊野玉置神社の「玉置山権現縁起」の「三狐神」の項にも登場し千与定として書かれます。（資料3「玉置山権現縁起」抜粋「三狐神」）

おそらく、三枚の月とは、この三狐神でしょう。三狐神は、御饌津神とも書かれますが、この御饌津神が、月になったという神話が、神道の書である「倭姫命世記」にみられます。（資料4「倭姫命世記」抜粋）

熊野には、三体月の伝説もあります。三枚の月が、三体月伝説の大本である事は、ほぼ間違いないでしょう。この三体月伝説の旧暦の十一月二三日に上がって来る月は写真のような形をした月です。この同じ形を、現在は、弾圧され消失した真言宗の一派である真言立川流では、三胡形（サン

コケイ）と呼んで崇拝していました。

胡には、狐の意味もあります。日本最初の辞書である和名類聚抄の狐の項に、「音胡和名木豆禰」『音は胡、和名は木豆禰』とあります。

私は、「三狐神（稲荷神）」に他ならない・・・そう考えます。

注「和名類聚抄」平安中期　承平年間（931年～938年）、勤子内親王の求めに応じて源順が編纂した。

稲葉根王子の稲荷神

データ

「稲荷神」

「円珍と石田川の畔で出会う翁」

「熊野信仰に関連する（稲葉根王子）」

「弘仁十二年（821）夏、あるいは、十三年（822）夏の出来事」（二十二社註式）（稲荷本縁起）

千代定が住んだ石田川の畔、稲葉根に、円珍（智證大師）が出会った稲荷神の話があります。

このお話は、地元文書である伊作田稲荷神社の「稲荷本縁起」、そして、室町時代に吉田兼倶が撰した「二十二社註式」に、伏見稲荷の項で書かれています。（資料5「稲荷本縁起」「二十二社註式」抜粋）

熊野権現＝稲荷神とすれば、石田川の畔に住んだという千代定と稲荷神は、全く同じでしょう。

さて、円珍ですが空海の親戚であり、同時に最澄の天台宗をつぎ、天台寺門派をおこした人物です。

後に、この宗派は最初の熊野検校である増誉を輩出しています。（解説2　智證大師・円珍について）

三体月の日に上がって来る月

平成25年1月5日紀伊民報より

三胡形（サンコケイ）

邪教・立川流　真鍋俊照著
ちくま学芸文庫
ISBN4-480-08703-6
p146より

弘仁7年（816）孟夏の此を以て、城外に経暦す矣。大和国宇知（宇智）郡にして、一人の猟者に遇う、其の形、深赤く、長八尺（2m40cm）許り、小き袖の青き衣を着たり。骨ね高く筋ぢ太くして、弓箭を以て身に帯す。大小二つの黒犬之れに随従す。則ち和尚が通るを遇い見て不審に問う。和尚は踟蹰（ちゅうちょ）しつつ子細を問いて訊ねた。猟者の云く。我は南山の犬飼なり。山地万許町を知る所なり。其の中に於て幽平の原有り。霊瑞至って多し。和尚来住したまへ。自を以て助成せん。犬を追放て走ら令るの間、即ち失ぬ

解説　「金剛峰寺建立修業縁起」は、康保五年（968）に仁海（951～1046年）によって書かれたとされる。「二十五箇条御遺告」「空海僧都伝」に次ぐ、最古の空海の伝記の一つである。

資料9　「熊野権現秘事の巻」

權現宮縁起并秘事

紀州牟呂郡田邊庄權現宮御鎮座者　神代之昔海龍王山現　神光矣熟尋其　濫觴礒間浦之海中有一嶋稱加四磨北有　岩名神楽岩濱有村名神子濱村彼　神光現海龍王山之時天女降村奏舞楽故彼村名彼名寄岩波濤自為琴鼓之妙声放彼岩名彼名龍王忽然浮海捧燈向山放彼山名彼名　龍王結草・為假金殿故名假庵山　彼神龍招請拍掌曰此所清浄也願影向也言未終　一圓神光止テ此山可謂三元之神妙不得而測者也矣　隨神龍之所乞神光假庵山敬止天神 龍秋津野欲往而居間従海中不測之山也　釼以号龍仙　従山貝空出テ時神龍顕大己貴命尊容駕天羽車上テ虚空従彼山麓神光起雲此所雲森興天羽車共止テ龍仙 頂云　今所見宮則是也

天武天王十三甲申歳六月

始祭之搆十二殿奉崇　天神地祇

神祇式口傳

「（中国の）霊山において、あなたを拝んでお会いしたときに交わした誓約を忘れることはできません。生の形は違っていても心は同じです。私には秘教を日本に伝え隆盛させたいという願いがあります。神様には仏法の擁護をお願い申し上げます。都の西南、京の九条に東寺という大伽藍があります。ここで国家を鎮護するために密教を興すつもりです。この寺でお待ちしておりますので、必ずお越しください」と仲むつまじく語らい会って、神の化身と空海は盟約を結んだ。

弘仁14年（823）正月19日。空海は天皇より東寺を賜り、之をうけて、法文、曼荼羅、道具等を運び込み、経蔵を納めて、真言の道場とした。同年4月13日。紀州で出会った神の化身が椙の葉を提げ稲を荷ない、ふたりの婦人とふたりの子供を伴って東寺の南門に再びやって来た。空海は大喜びして一行をもてなした。心より敬いながら、神の化身に飯をお供えし、菓子を献じた。その後しばらくの間、一行は八条二階の柴守の家に寄宿したが、その間空海は京の南東に東寺の造営のための材木を切り出す山を定めた。また、この山に17日のあいだ祈りを捧げて神に鎮座していただいた。この事が現在まで伝わる由縁となっている。

解説　「稲荷対明神流記」は、京都の東寺に伝わるもので、寛文元年（1661）に補修したと記録があり、至徳三年（1385）六月十六日に權律師融然が東寺權學會聽聞の節、權智院にて書寫したものと奥書に書かれている。この稲荷灌頂の話は、冒頭にあるように、空海の弟で、空海の十大弟子の一人、東寺一長者でもあった真雅（法光大師）が記録したものと書かれている。

資料8　「金剛峰寺建立修業縁起」抜粋

以弘仁七年孟夏之此出城外経暦矣大和国宇知郡遇一人ノ猟者其形深赤長八尺許着小袖青衣骨高筋太以弓箭帯身大小二黒犬随従之則見和尚遇通問不審和尚踟蹰問訊子細猟者云我是南山犬飼所知山地万許町於其中有幽平原霊瑞至多和尚来住自以助成追放犬令走之間、即失

田辺、高山寺・伊作田の稲荷神

データ

「弘仁七年（816）猛夏、あるいは弘仁十二年（821）夏の出来事」　田辺領寺院神社書上帳・高山寺の項「縁起写」

「空海と田辺で出会う」

「稲荷神」　稲荷大明神流記

「異相の翁（身長八尺・骨高く、筋太し）」

「中国・唐の国で稲荷神は空海と誓約を結んでいる。この時の姿は翁ではなかった（美女?）」

「伏見稲荷の神として、京都東寺の建設に関わる」

円珍は稲葉根で稲荷神と会うのですが、同じ稲荷神と言われる者が空海と田辺であっています。

この事は、地元文書である「田辺領寺院神社書上帳」の高山寺の項や稲荷神社の項に書かれている他（資料6「田辺領寺院神社書上帳」高山寺の項・稲荷神社の項、抜粋）京都・東寺に伝わる「稲荷大明神流記」に書かれています。（資料7「稲荷大明神流記」抜粋）

「稲荷大明神流記」によれば、この時、空海は、稲荷神とは、すでに中国の霊山で会っていて、そこで誓約を取り交わしたとしています。また、「生の形は異なっていても、心は同じだ」と暗にこの時は、翁の姿でなかった事をほのめかしています。

そして、弘仁十四年（823）四月十三日に、京都の街に、翁は、伏見稲荷の稲荷神として再び現れ、平安京の東寺の建設に力を貸したとされます。

南山の犬飼・狩場明神

データ

「弘仁七年（816）猛夏の出来事」
「空海と大和国・宇智郡で出会う」
「南山（熊野）の犬飼」
「異相の翁（深赤く、身長八尺。骨高く、筋太し）」
「中国（明州・寧波）から飛んできた三鈷（三孤？）の行方を空海に伝える」
「丹生都姫（中国風の美女）の化身」
「高野山の建設に関わる」

高野山建設に関わったとされる狩場明神・・・この伝説は、高野山に伝わる「金剛峰寺建立修行縁起」に書かれています。（資料８「金剛峰寺建立修行縁起」抜粋）

唐の明州（寧波）の港から飛んでいった三鈷の行方を捜す空海に、その三鈷が高野山にある事を告げる人物です。出会った場所は、大和国・宇智郡なのですが、彼自身は、「南山の犬飼」と名乗っています。そして風体は、空海が田辺であった稲荷神とほとんど同じです。

南山に大和国の意味はありません。藤原定家の発心門での漢詩に「南山月下結縁力　西刹雲中弔旅魂」注『後鳥羽院熊野御幸記』とあるように、「南山」は、熊野とその周辺の山々の事を指します。すなわち「南山の犬飼」とは「熊野の犬飼」と、同じ意味だということになります。

注　３ページに紹介した「熊野道之間愚記」は、「後鳥羽院熊野御幸記」の別名です。

※注　田辺領寺院神社書上帳は、何種類かあるが、これは、文化十三年（１８１６）に書かれたもの。残念ながら、筆者は、原文を確認出来ず、本文は宮本惠司氏の「民話巻之中」によった。訳文は、筆者による意訳。

資料７　「稲荷大明神流記」抜粋

眞雅記云ゝ

弘仁七年孟夏之此大和尚斗藪之時於紀州田邊宿遇異相老翁其長八尺許骨高筋太内大權氣外示凡夫相見和尚快語曰吾有神通（道）聖在威徳也方今菩薩到此所弟子幸也和尚曰於霊山面拜之時誓約未忘此生他生形異心同予有秘教紹隆之願神在佛法擁護之誓請共弘法利生同遊覺臺夫帝都坤角九條一坊有一大伽藍號東寺為鎮護國家可興密教霊場也必々奉待々々面巳他（化）人曰必参會守和尚之法命等云々同 十四年正月十九日和尚忝賜東寺為密教道場也因之請來法文曼荼羅道具等悉納大経藏畢其後同四月十三日彼紀州之化人來臨東寺南門荷稲提楫葉率兩女具二子矣和尚勸喜授興法味道俗歸敬備飯獻菓爾後暫寄宿二階紫（柴）守其間點當寺杣山定利生勝地一七ヶ日夜之間依法鎮壇法爾莊嚴然而圓現矣爲後生記綱目耳

訳文

真雅記の云う

弘仁７年（８１６）の孟夏の頃、空海は修行中、紀州・田辺の宿で稲荷神の化身である異相の老翁と出会った。身長約八尺（２メートル４０センチ）、骨高く筋太くして、内に大權の気を含み、外に凡夫の相を現していた。翁は空海に会うと喜んで声をかけた。

「吾は神であり、聖には威徳がある。今ここに、菩薩にあうは、弟子にとっての幸いであるぞよ。」

空海はこう述べた。

弘仁十二年夏弘法大師欲謁熊野崇廟路出田辺於湊邑里遇稲荷翁矣大師知異人乃問曰く観乃為擔夫荷稲斯夫荷誰也翁曰我是稲荷神也為擔夫擬何師之法稲乃爾我之与師有縁尚矣今遇奉于期地是実翁幸也永于垂跡而護人護法矣師曰吾如今入于熊野三山途徹当区与神交見値偶誠厚矣・・・（後略）

訳文

弘仁12年夏。弘法大師が熊野の崇廟を訪れようと欲して路に出でて、田辺の湊邑里に於いて稲を荷なう翁に遇った。大師はその人を観て異人であると知り「そこの稲を荷なう方、貴方は誰ですか」と問うと、翁は「私は稲荷神である。今、縁があって、ここで大師と遇ったというのは、爾がこの我が稲の法の師となるべき人であろう。この事は、実にこの翁にとって幸いである。どうか垂跡を受け、永く人を護り法を護りたまえ。」と言った。大師は「吾は、今、熊野三山に入ろうとして、当区で神と交わい見る事となりました。まったく、ありがたい事です。」とおっしゃった。

「稲荷大明神」

鎮座之時代ハ嵯峨天皇御宇弘仁年中弘法大師熊野御参詣之時当所田辺二而稲荷大明神江御対顔仏法之守護神二而御契諾之由縁記御座候稲荷御顕現之地田辺庄之内湊村と申所江社造立仕候其後伊作田村岩城山江奉移候・・・（以下略）

訳文

鎮座の時代は嵯峨天皇の御代である弘仁年中で、弘法大師が熊野参詣の時、当所、田辺において稲荷大明神に対顔し仏法の守護神になっていただく事をご承諾いただいた由縁が記されております。この御稲荷の出現された地、田辺の庄の湊村という所へ社を造り、その後、伊作田村岩城山へお移ししたとの事です。

「南山の犬飼」が行方を告げた中国から飛んできた「三鈷」とは、「三枚月」と同じく「三狐」の事ではないでしょうか？

さらに、南山の犬飼・狩場明神は、丹生都姫の変化した姿であったとされています。丹生都姫は、写真のように、しばしば、中国風の衣裳を纏った美女として描かれています。

そのことから、私は、明州の港から飛んで来た三鈷（三狐）と、この丹生都姫は、同じイメージの者を現すのではないかと考えます。

今熊野観音寺・熊野権現

データ

「空海と東山で出会う」

「熊野権現を名乗る老翁」

「天照大御神手彫りの十一面観音を空海に伝える」

今熊野観音寺の創設縁起とされるのが、京都東山で空海と出会ったとされる熊野権現です。彼は、空海に天照大御神が手彫りした十一面観音を伝えました。（解説3　今熊野観音寺・縁起について）

今熊野観音寺は、第一集の「熊野楊貴妃信仰説」に書きましたが、楊貴妃観音のある泉涌寺の敷地内にあり、泉涌寺の元となったとされる寺院です。

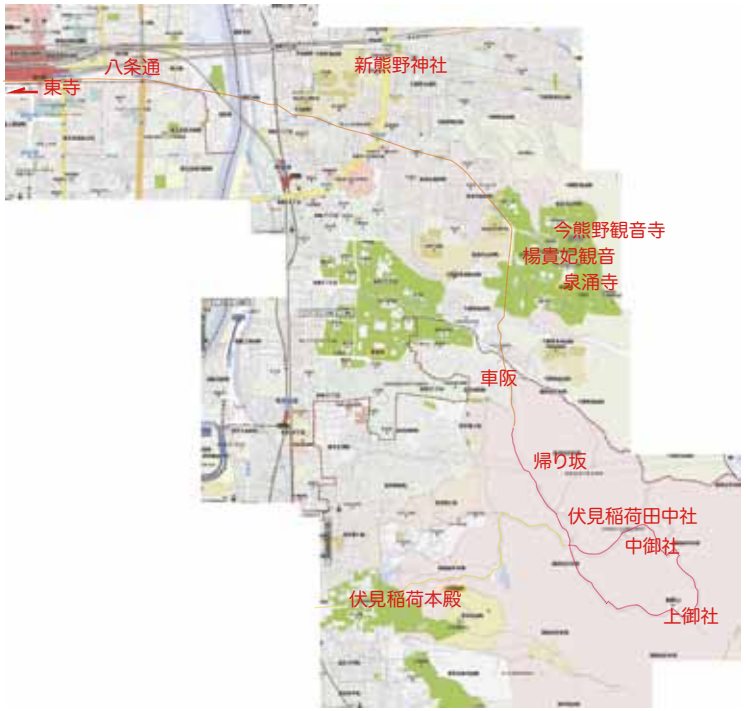
金剛峰寺所蔵 弘法大師・丹生高野両明神像（問答講本尊像）より

「稲荷大明神流記（資料７）」によれば、田辺で空海と出会った稲荷神は、京都に現われ、東寺建設のための樹を稲荷山から切り出す事を許し、八条二階の柴守の家に寄宿した事になっています。

稲荷山、泉涌寺・楊貴妃観音、今熊野観音寺、八条・・・この関係を地図に示すと、下図のようになります。

下図に示す帰り坂は、現在、「京都一周トレイル」コースになっています。深草稲荷保勝会の出版する「深草稲荷」の本によれば、これが、空海が東寺を造るため、木材を運び出した車道だそうです。

現在は、五社之瀧神社、泉涌寺で分断されていますが、この帰り坂の道をまっすぐ伸ばすと、現在の泉涌寺道になります。そして、鴨川を超えて、泉涌寺道の延長上に八条通りが続いています。空海が、東寺に稲荷山から切り出した木材を運んだルートは、これであったでしょう。この車道の稲荷山を降りたところに、楊貴妃観音や今熊野観音寺があるわけです。ここから、私は田辺の稲荷神と今熊野の熊野権現は同じ人物だったと考えます。



い、二人の女を連れて歩いていた。一人は、４０歳ばかりで、もう一人は３０歳ばかりであった・・・（中略）大師は、彼の翁に問い「貴君方は、異相で、人であるとは思えません。心は慈悲深く身体には衆乗の利益の相があります。・・・（中略）しからば、我が宗派の守護神となっていただけないでしょうか?」と・・・（後略）

※注　本原文は、宮本惠司氏の「民話巻之中」に掲載のものを引用した。訳文は、筆者による意訳。

「二十二社註式」抜粋

或記曰。人皇五十二代嵯峨天皇弘仁十二年夏。智證大師参熊野。以顕密法還向之時。過紀伊國石田川下稲羽里之間。一人老翁多刈稲荷之。二人女亦戴稲。不知行方失訖。其夜大師夢。一人老翁者上宮。二人女下中社云々。今案。稲荷社者。秦氏遠祖也云々。

訳文

或る記に曰く。人皇５２代嵯峨天皇の弘仁１２年（８２１）夏。智證大師（円珍）が熊野に参り、密法を顕じて還向されました。紀伊の国石田川の下稲羽の里（稲葉根）を通り過ぎようとしていた時でした。一人の老翁が刈った稲を荷ない、二人の女が、また、稲を載せて歩いているのに出会いましたが、行方も知れずその姿を見失いました。其の夜、大師は夢を見ました。一人の老翁は上の宮。二人の女は下と中の社であるぞよと。今に言う稲荷社なる者であります。秦氏の遠祖であると云います。

解説　「二十二社註式」は、文明元年（１４６９）に吉田兼倶が撰したとされる日本の主な神社２２社の縁起をまとめたもの。抜粋した文は、伏見稲荷の項の解説である。

資料６　「田辺領寺院神社書上帳」高山寺の項・稲荷神社の項抜粋

「高山寺縁起写」

資料４「倭姫命世記」抜粋

天地開闢之初。神寶日出之時。御饌都神興大日霎貴。豫結幽契。永治天下。言壽宣。肆或爲月爲日。永懸而不落。或爲神爲皇。常以無窮。

訳文

天地開闢のころ、初めて日が昇る時に、御饌都神と大日靈貴は、幽けき契を結んで、永く天下を照らし治めることの、言寿ぎをされた。或いは月となり日となり、永く落ちることなく、或いは神となり皇となり、常に窮み無かれと。

解説　神道五部書の一。神護景雲２年（７６８）禰宜五月麻呂の撰と伝えるが、建治・弘安（１２７５～１２８８）のころ、伊勢外宮の神官の渡会行忠の撰になったもの。

資料５「稲荷本縁起」「二十二社註式」抜粋

「稲荷本縁起」

智證大師弘仁十三年夏熊野ノ権現ニ参顕密以法文三所権現ノ威光ヲ奉御下向ノ時紀伊国岩田川下ニイナバ子ノ里ヲ通リ給シニ年老タル翁稲ヲニナヒ二人之女ヲ相具ス一人八年四十計一人八三十計也・・・（中略）大師彼翁ニ問給汝等八異相之人也直人ニ非ス心ニハ慈悲深重ニシテ身ニハ衆生利益之相アリ・・・（中略）只然ハ我宗之守護神ト成給ナンヤト・・・（後略）

訳文

智證大師（円珍）が弘仁１３年（８２２）夏、熊野権現に参詣し密かに三所権現の威光の法文を奉じて下向の時でした。紀伊の国岩田川の下、イナバ子（稲葉根）の里に通っていると、そこで年老いた翁が稲を荷な

田辺・龍神山の龍神・大己貴命

データ

「田辺・神子浜に上陸する龍神（柳人?）・神光」

「大己貴命尊（飛滝権現・熊野権現）に変化する」

「天羽車に乗って龍神山に向かう」

稲荷神が熊野権現と同一であるとするならば、田辺闘鶏神社に伝わる「熊野権現秘事の巻」として伝えられた古文書に登場する龍神・大己貴命も、空海が田辺で会った稲荷神と同一であると考える事が出来るでしょう。（資料９「熊野権現秘事の巻」）

ただ、この古文書には「天武天皇十三年（６８４）六月」という日付が書かれており、空海の時代とは離れすぎて合わないのですが、私には、この「天武天皇十三年」という記述は、信じられません。

この文書は、「権現宮縁起」です。権現とは、皆さんもご存知のとおり、仏の力が神となって発現したものです。すなわち、本地垂迹説によって生まれた考えです。

本地垂迹説は、奈良時代の終わりから平安時代に生まれてきた考えだとされています。天武天皇の時代に、「権現」という概念はありませんでした。

したがって、この「天武天皇十三年六月」記述というのは明らかな曲筆です。

文書は、神光、又は、龍神が、海から田辺に上陸し、天羽車に乗って龍神山に向かうまでを描いています。何か貴い者が上陸し、男に導かれて、この地に潜んだ事を想像させます。

注　「龍神山とその里山」（龍神山編集委員会）に空海は『高山寺を建立するに当り、先ず裏鬼門の方角に当る龍神山に登り荒れはてていた神殿を改築され、遠く京都から愛宕さんを迎えられて末社とし「げどの谷」の大岩の上で護摩を焚いて天地の神々に祈り捧げました。』とあり、空海の稲荷神伝説とこの龍神山の伝説の間には密接な関係がある事を伺わせる。

龍神村の難陀竜王

データ

「空海に龍神温泉を紹介する翁」
「難陀竜王（飛瀧権現・熊野権現？）」
「弘仁年間八旬気（八月？）の出来事」

龍神温泉は、役行者が見つけたと伝わっていますが、もう一つ、なぜか空海が弘仁年間に難陀竜王から温泉がある事を教えられて開湯したという伝承も伝わっています。（解説４　空海と龍神温泉について）

弘仁年間に空海と出会ったとは、田辺の稲荷神と同じ逸話となり、この難陀竜王が稲荷神と同じ人物だった事を連想させます。

また、前ページにあげた大己貴命ですが、那智では、これを第一殿、那智の滝、飛瀧神社の飛瀧権現であるとしています。

同時に、那智には中世には編纂されていた「熊野山略紀」という書物が伝わっていて、その中に、飛瀧権現は、難陀竜王が化現したものだと書かれているのです。（資料10「熊野山略紀」抜粋）

そうだとすれば、大己貴命と難陀竜王も、同じ人物を現しているという事になります。

大己貴命が向かったとされる上秋津の龍神山ですが、「田辺万代記」寛文元年（１６６１）の記事には「龍前と申す山」と書かれているそうです。前があるなら、その後もあるはずです。

降りになった。それから６１年後の庚午の年、新宮の東の阿須加の社の北、石淵の谷に勧請し奉った。初めは結玉家津美御子と申した。二宇の社であった。それから１３年が過ぎた。　壬午の年、本宮大湯原（大斎原）の一位木の３本の梢に３枚の月形にて天降りなさった。８年が経った。　庚寅の年、石多河（石田川）の南、河内の住人、熊野部千代定という犬飼（猟師）が体長１丈５尺（約４・５ｍ）もの猪を射た。跡を追い尋ねて、石多河を遡った。犬が猪の跡を追って行くと、大湯原に行き着いた。件の猪は一位の木の本に死に伏していた。肉を取って食べた。件の木の下で一夜、泊まったが、木の梢に月を見つけて問い申し上げた。「どうして月が虚空を離れて木の梢にいらっしゃるのか」と。月が犬飼に答えておっしゃった。「我は熊野三所権現である」と。「一社は證誠大菩薩と申す。今２枚の月は両所権現と申す」とおっしゃった。

解説　長寛勘文は、平安時代の長寛年間（１１６３年－１１６４年）に編纂された裁判資料。熊野社領である甲斐国八代荘で発生した八代荘停廃事件を機にまとめられた。勘文中に「熊野権現垂迹縁起」が引用されており、「熊野権現垂迹縁起」が、この長寛年間より前に成立している事が決定付けられる。

資料３　「玉置山権現縁起」抜粋「三狐神」

三狐神所謂天狐地狐人狐也。於新宮者飛鳥二住。則漢司符将軍之妻室。三大明神之母也。権現之御氏人千与定子。嫡子雅顕長者。次男長寛長者八今飛鳥大行事ナリ其子地平符将軍。其子漢司符将軍。鎮西彦山二於テ上津河原大明神ト号ス新宮二於テ牛鼻大明神ト号ス本地毘沙門其子三大明神者榎本直俊本地不動、宇井基成本地大日、鈴木基行本地毘沙門天王也。

解説　玉置山権現縁起は、奥熊野玉置神社の縁起であり、抜粋個所は、摂社の三柱神社の縁起である。

三柱神社は古くは三狐神と呼ばれ、俗に稲荷社と呼ばれている。熊野地方の稲荷信仰の要の神社として古くから信仰を集めていた。全国の稲荷社の基だともいわれている。

資料２「長寛勘文」より「熊野権現垂迹縁起」

熊野權現御垂跡縁起云。往昔、甲寅年唐乃天台山乃王子信奮跡也。日本國鎮西日子乃山峯雨振給。其躰八角奈留水精乃石高佐三尺六寸奈留仁天天下給布。次五ヶ年乎經天。戊午年、伊豫國乃石鐵乃峯仁渡給。次六年乎經旦。甲子年淡路國乃遊鶴羽乃峰仁渡給。次六箇年過。庚午年三月廿三日紀伊國無漏郡切部山乃西乃海乃北乃岸乃玉那木乃淵農上乃松木本渡給。次五十七年乎過。庚午年三月廿三日熊野新宮乃南農神蔵峯降給。次六十一年後庚午年新宮乃東農阿須加乃社乃北石淵乃谷仁勸請靜奉津留。始結玉家津美御子登申。一宇社也。次十三年乎過旦。壬午年本宮大湯原一位木三本乃末三枚月形仁天天降給。八箇年於經。庚寅農年石多河乃南河内乃住人熊野部千輿定土云犬飼。猪長一丈五尺奈留射。跡追尋旦石多河於上行。犬猪乃跡於聞旦行仁、大湯原行旦。件猪乃一位農木乃本仁死伏世利。宍於取旦食。件木下仁一宿於經旦木農末月乎見付旦問申具。何月虚空於離旦木乃末仁波御坐止申仁。月犬飼仁答仰云。我乎波熊野三所權現止所申。一社乎證誠大菩薩土申。今二枚月乎者兩所權現土奈牟申仰給布云々。

訳文

熊野權現御垂跡縁起の伝え。

昔、甲寅の年、唐の天台山の王子信（王子晋。中国の天台山の地主神）の旧跡が、日本の鎮西（九州）の日子の山峯（英彦山）に天降りになった。その形は八角形の水晶の石で、高さは3尺6寸。そのような姿で天降りになった。それから5年が経った。戊午の年、伊予国（今の愛媛県）の石槌の峯（石槌山）にお渡りになった。それから6年が経った。甲子の年、淡路国（今の兵庫県の淡路島）の遊鶴羽の峰（諭鶴羽山）にお渡りになった。それから6年が過ぎた。庚午の年3月23日、紀伊国牟婁郡切部山の西の海の北の岸に玉那木の淵の上の松の木の本にお渡りになった。それから57年が過ぎた。庚午の年3月23日、熊野新宮の南の神蔵の峯にお

注※王子晋は、古代中国、周の霊王の太子であり、若くして亡くなり仙人になったとされる。しかし、笙の名手とされ、伝説の上で、西王母の侍女である王子登と同一視されている。また、白居易の詩「王子晋廟」の中では、楊貴妃が舞った霓裳羽衣の曲を吹くとされる。

「熊野権現秘事の巻」に出て来る地名を地図に落としてみましょう。

こうしてみると、神島、神楽島、旗島、神子浜、假庵山、雲の森・・・ほとんどまっすぐに並んでいる事がわかります。

そして、ほぼ、その延長上に、龍神山があり、さらにその先に、龍神村・龍神温泉があるのです。

龍神山が、本来は、龍前山であり、龍神温泉に現われた難陀竜王が、龍神山に向かったとされる大己貴命と同一人物だったとすれば・・・大己貴命が引き連れていた神光・龍神と称される貴き者も、龍神山ではなく、龍神村・龍神温泉に向かい・・・そこに潜み隠れていたのではないでしょうか？

この男の伝説・記録をまとめると・・・

南山の犬飼 狩場明神	田辺 稲荷神	稲葉根王子 稲荷神	熊野の犬飼 千代定
三鈷（さんこ）の行方を伝える。	稲荷神	稲荷神	三狐神の父 三枚月の庇護者
		稲葉根王子	三枚月＝熊野権現
高野山の地を教える			
	田辺で会う		
	京都・東寺に現われる		
大和国・宇智郡で出会う			
		石田川の畔	石田川河内の住人
三鈷は中国明州（寧波）の港から飛来	唐（中国）の霊山で誓約を結ぶ		三枚月 熊野権現は中国天台山から飛来
丹生津姫（美女）の変化	唐の国では、翁の姿ではなかった。女性を連れる。	女性を連れる	三狐神は女性
	老翁	老翁	
南山（熊野）の犬飼			熊野の犬飼
深赤く、身長８尺骨高く、筋太し	異相、身長８尺骨高く、筋太し	異相	
弘仁７年孟夏の頃	弘仁７年孟夏の頃 弘仁 12 年夏 弘仁 14 年４月 13 日（京都）	弘仁 12 年夏 又は弘仁 13 年夏	
空海の高野山建設に協力する	空海の東寺建設に協力する		
		円珍と出会う	円珍は 初代熊野検校となった園城寺 増誉聖護院派の遠祖

稲荷御拝御経供養如例、此間私奉幣候法筵護云々取布施、「俊家中將」予導師布施了、即入御二條殿云儀猶、此人数可參云々然而觸小々人々自是退出、入九條小食了、即馳出參日吉依休、私宿願也（即禮世々參日吉事）

於馬場邊遇春宮權大夫末時許參着奉幣了、即馳帰、於清閑寺辺、取松明帰京、洗髪沐浴了付寝今夜魚食

「修明門院熊野御幸記」（藤原頼資）

承元四年（1210）五月十二日

己亥、天晴、権弁先陣參**稲荷**、御奉幣事為沙汰具云々、予參御所、人々遅參、加催、日出以後数刻之後有出御、信能朝臣・予前駈、巳一点着御**稲荷社**、（御迎人々済々參会）於鳥居内有御禊、権弁持幣立、少将（信能）・予勤御贖物役送、次參御宝前、（御興）御奉幣、神主申祝、賽祓之時進椙葉、御先達伝進之、主典代給禄、次有御経供養、此間予逐電、私奉幣、護法送之後、腰椙葉帰參、即被引御布施、

御導師、被物一重、（宰相中将取之）裏物、（信能朝臣取之）

題名僧、裏物、（予等取之）

次御參命婦御前、御奉幣以後、參御鳥居内小社前、為護法送也、御奉幣之後、入御々車寄御所、（出几帳、儲御屏風、命婦西廊端西面妻戸為其処）

次源大納言（通光）直衣、參進、寄御車、公卿・殿上人、束帯・直衣・布衣各有之、

道御共人々自此所逐電、窮屈之間早以退出、委不見及、

（以下略　御幸の人数、編成などが続く）

※稲荷社の部分だけわかりやすいように、原文を太字にした。

以上は、全て、熊野参詣の日誌の一部であり、抜き書き部分は、全て、京都に帰ってきてから伏見稲荷に参詣した記録である。このように稲荷参拝は、熊野参詣の一部分であったことがわかる。

伝説・記録 ＼ 関連項目	龍神村 難陀竜王	田辺 龍神・大己貴命	今熊野観音寺 熊野権現
キツネ 稲荷神			伏見稲荷の麓にあり今熊野観音寺には稲荷神を祀る社がある
熊野権現	難陀竜王・飛瀧権現	大己貴命・飛瀧権現 熊野権現	老翁は熊野権現を名乗る今熊野観音寺には熊野権現を祀る社がある
龍神	龍神温泉・龍神村の名前の由来となる	龍神として上陸 龍神山に向かう	
高野山			
田辺		田辺神子浜に上陸 假庵山に宿泊	
京都・東寺			空海が京都・東寺に逗留中、東山に現われる
大和国・宇智郡			
石田川			
中国から渡来		海から上陸	
美女	三美人の湯（美女）	神光　天女（美女）	天照大御神 楊貴妃観音（美女）
翁	老人		白髪の老翁
犬飼			
姿・形			
年月日	弘仁年間 ８旬気（８月）	天武天皇13年6月に記述された	
空海	空海に温泉を伝える		空海に十一面観音像を授ける
円珍			十一面観音像の傍らに、円珍作と伝わる不動明王がある。

関連すると思われるが、明確でない部分はグレーで示し、完全に一致する項目は、色を揃えて示した。矛盾する部分は、白抜き文字で表した。

資料１　「為房卿記」「中右記」「熊野道之間愚記」「脩明門院熊野御幸記」

「為房卿記」（藤原為房）

永保元年（１０８１）十月十二日

丙寅、戌刻、参**稲荷社**奉幣是例事也。庄極技□笠同刻帰洛、先到精進屋解除、次日本所休息了、今度修行如兼日支度毎事物吉。

「中右記」（藤原宗忠）

天仁二年（１１０９）十一月一〇日

天晴之後、先祓出宿所、参**稲荷**、「於下御社鳥居内西向祓」先参下御社奉幣、「大一捧」次参若宮社「小一捧」次参阿古万千奉幣、「小一捧」次登坂従鳥居下南行、居峯上向八幡方奉幣、「大一捧、不付奈支葉、他皆付之」次参谷中小社、「小一捧」次参中御社、「大二捧」次参上御社、「大一捧、小一捧」廻其後参樹下小社讀心経、「不及奉幣」次施粉於面、無音過鳥居前、於帰坂下先達奉送、日者護法、日者相具、鳥一雙来受施食、頗動心情、於此處食餅、是例事云々、下従山後、参田中明神社奉幣、「小一捧」於法性寺東大門前乗車、午刻帰家、引小僧供菓子、是日者之残物也、此先達聖人之所教、毎日早且浴寒水一度、次礼拝念誦可随心也者、如此事先達之教命不同云々、帰洛之後初食魚味也、是定事者

「熊野道之間愚記」後鳥羽院熊野御幸記（藤原定家）

建仁元年（１２０１）十月二六日　天晴

鷄鳴之程御幸入御云々、但只今即出御之由、左中辨示送之仍立出、天明之程入御鳥羽御精進屋即又出御御幸、御参**稲荷**事

阿羅毘可と楊貴妃

ケースをまとめると、関係すると思われる物語が何通りかあります。これが、ジクゾーパズルのように互いに補完しあっていて、結局、これが一人の男の物語である事がわかるでしょう。

矛盾する点は、神子浜から上陸した龍神の記録の天武天皇十三年六月という記述ですが、これは、先に説明したように、まっとうな記述とは考えられません。

私は、この男を、田辺の空海と出会った伊作田稲荷明神の旧名をとって、「阿羅毘可（あらびか）」と呼びたいと思います。

「稲荷大明神流記（資料７）」や「金剛峰寺建立修行縁起（資料８）」の記述をとれば、阿羅毘可（あらびか）は、褐色の肌を持ち（深赤く）、見上げるような大男で（身長八尺）、彫りが深く（骨高く）筋肉質（筋太し）という人間です。これは、日本人というより、中東系のアーリア人のイメージが浮かんできます。

私は、阿羅毘可（あらびか）とは、「アラビア」の事ではないかと思います。英語で「アラビカ」の意味は、「アラビアの」です。アラビアは、紀元前８５３年のアッシリアの碑文にアラブの王という記述があるそうで、とても古くからの地名だと言われています。

彼が、アラビア半島の出身か・・・それに関連するものだったために、彼は「アラビカ」と呼ばれていたのではないでしょうか・・。

そして、彼の陰には、キツネか龍神をイメージさせる中国から渡ってきた美女の存在が見え隠れしていて、彼は、この美女とも同一視されているようです。

資料編

私は、楊貴妃は、「ヤナギ」や「キツネ」を連想させる・・・しなやかで細身の美しい肉体を持ち、切れ長で涼しげな瞳をもった女性だったと考えています。

第一集の「熊野楊貴妃信仰説」に述べたとおり、楊貴妃は、西王母と同体と考えられていました。そして、西王母は、「九尾の狐」を使い神としていました。これは、間違いない確実な出来事です。

キツネには、美女に化けるという伝説があります。私は、楊貴妃と同時代人の吉備真備(きびのまきび)によって日本に連れて来られた「玉藻前(たまものまえ)・九尾の狐」の渡来伝説も楊貴妃がモデルになっていると考えています。楊貴妃は、「キツネ」の噂のある美女だったでしょう。そして、楊貴妃は、その美しさを「柳眉(りゅうび)」「柳腰(りゅうよう)」などと讃(たた)えられていました。私は、「龍神」とは、楊貴妃を現す「柳人(りゅうじん)」の意味だと考えます。

楊貴妃の事を調べている人の中には、後代に書かれた小説を引き合いに出して、楊貴妃はグラマラスなぽっちゃり型の女性だから、「キツネの美女ではないのだ」などと言っている人もいます。

しかし、楊貴妃と同時代人だった李白や杜甫、そして、楊貴妃が死んだとされてから、５０年後ではありますが、楊貴妃の事を詳しく調べていた白居易(はっきょい)は、長恨歌の中で明らかに、楊貴妃を細身でしなやかな肉体をもった美女として詠い上げています。

楊貴妃白豚伝説は、おそらく、日本に渡ったと噂のあるキツネの美女を、「楊貴妃ではない」とするために意図的に捏造(ねつぞう)されたデマだったのではないでしょうか。

※楊貴妃が、キツネ型の美女で、九尾の狐伝説の元になったと考えられる理由について、詳しく解説していくと、とても、この小冊子にはおさまりません。筆者ホームページ「龍神楊貴妃伝」の中で、証明していますのでこちらを御覧ください。

「龍神楊貴妃伝・楊貴妃はキツネと呼ばれる美女だった」http://www.minomusi.net/youkihi/kyubikitune.html

おわりに

変な例えかもしれませんが・・・山口さんと加藤君が付き合っているという噂があったとしましょう。それが、同じ駅を降りるから・・・というのでは、それは、正直、噂の証明になっていません。

携帯の電話帳に互いの名前があったから・・・という理由であっても、お互いが知り合いである事を証明するだけで、つきあっている証明にはなりません。山口さんがスーパーで買っていたと同じおかずが次の日の加藤君の弁当に入っていた・・・としても、それが、山口さんが買ったものであるとは言えず、つきあっているという証明にはなりません。

一つ、一つの根拠は、まったくとるに足りません。別の説明は、いくらでも出来ます。

しかし、こういった根拠や証拠が幾つも幾つも積み上がってくる事によって、一つの方向に結論が集約されてくるわけです。私が「楊貴妃が来た」と主張するのは、そういう理由です。どうか、総合的に判断してください。

第一集で語った「ヤタガラスが三本足」の理由、「五衰殿の女御の伝説」の意味、「楊子のお柳さんの伝説」の意味・・・今回語った「三枚月伝説」の意味、「三体月伝説」の意味、「南山の犬飼」の伝説の意味、「空海の飛行三鈷伝説」の意味。いろいろな人が、それぞれに、もっともらしい理由や理屈をつけて説明しています。

言っては悪いですが、そんな個別の説明は、先の例え話と同じで、誰にでも、いくらだって考えられます。

この「龍神楊貴妃伝」は、バラバラに説明されている・・・それらの全てを、そして、これ以外にも多くの出来事を・・・「楊貴妃が渡来した」という一本の理由だけで説明出来てしまうのです。他に、そんな考えがあるでしょうか?

もちろん、それでも、それに反する別な証拠が出てきたら、例えば・・・山口さんと加藤君が、実は、名字の違う兄妹だ！なんて話があったら考えを根本的に改めなければならないかもしれません。

その意味で、私は、自分の言っている事を仮説だと自覚しています。

しかし、今のところ、一つの反証も、説明のつかない矛盾点も、私には見つけることが出来ないのです。

ご意見や反論、ご質問等、いただけましたら幸いです。

さて、ここからは、阿羅毘可の伝説から生じた私の想像と推理です。この短い小冊子では、存分に説明は出来ませんので、飛び過ぎだと感じる部分もあるかもしれませんが、ご容赦ください。

阿羅毘可は、楊貴妃に仕え、楊貴妃と共に、日本に渡ってきたアラブ人でありました。

「空海の飛行三鈷伝説」や「熊野権現垂迹縁起（資料2）」からの想像ですが、楊貴妃と阿羅毘可は、天台山の麓である「明州・寧波」の港を出航し、大宰府（英彦山麓）にたどりついたでしょう。そこから、伊予の国や淡路島を経由して紀伊の国にやってきたと考えます。

私は、楊貴妃は、孝謙天皇の許しを受けて、天皇の所縁の土地でもあった紀伊の国に、唐の国の追っ手から隠れ住む事の出来る安住の地を捜したと思います。それが龍神村でした。

「熊野権現秘事の巻（資料9）」によれば、田辺に上陸した若き日の阿羅毘可は、楊貴妃を「天の羽車」（唐の国で高貴な人の乗る雲の模様の車？）に乗せて龍神村に向かったでしょう。その後、楊貴妃は、注玄宗上皇が送り込んできた方士に発見されるまで、長い間、龍神村に隠れ棲んでいました。

それから、およそ五十年後です。唐の国で楊貴妃の行跡を追いかけ、調べてきた空海は、老人となった阿羅毘可を探し出し、その協力を得て、大和国で崇り神とされていた楊貴妃の墓を、丹生都姫（二宇の社）、あるいは、大日如来（西王母＝日月を支配する存在）として高野山に祀り直しました。

そして、平安京に東寺を建設した際には、秦氏の持ち山であった稲荷山から木を切り出すために、再び、阿羅毘可の協力を得て、楊貴妃を灌頂し、秦氏に与え、祀ったでしょう。（※秦氏は、渡来の民であると言われています。楊貴妃を祀る事は、彼らにとって願ったりかなったりだったでしょう）

注　楊貴妃を愛し、かつ、楊貴妃に死罪の命令を下した楊貴妃の夫。玄宗が楊貴妃を捜して、方士を蓬莱に送り込む話が、長恨歌に書かれる。

一方、空海の親戚であり、同時に、最澄の天台宗をついで天台座主となった円珍も、大叔父、又は伯父である空海を尊敬しつつも、天台座主として、空海の真言宗に対抗すべく、唐の国に渡り、楊貴妃の痕跡を追い、阿羅毘可の協力を得て、熊野を天台の楊貴妃信仰の場として作りあげていきました。

阿羅毘可が熊野有馬村（イザナミの墓である花の窟／産田神社のある村）の神器を運び、熊野本宮を作り上げていった様子が、本宮に伝わる「熊野伝記」もしくは「本宮社記」という古文書にみえます。この中での阿羅毘可は、「千代挟田」という名前で登場します。（資料11「熊野伝記・本宮社記」）

円珍と阿羅毘可は、楊貴妃を、全ての神仙の母としての西王母、すなわち、イザナミと同体として、楊貴妃が憧れていた蓬莱・熊野の地に祀り、そして、楊貴妃の上陸した田辺から熊野に向かう道を修験の道として開拓しました。

これが、熊野古道の始まりであったと私は考えます。

私が、今回述べるのは、ここまでです。

楊貴妃が龍神村を出た後、どのような生涯を送ったのか・・・なぜ空海が、楊貴妃の行跡を追いかける事になるのか・・・なぜ、平安末期に、楊貴妃信仰が爆発的な信奉を集めるのか・・・繰り返しになりますが、この小冊子は、「龍神楊貴妃伝」のほんのごく一部を述べているに過ぎません。

多くの解説は、インターネット上にあります。裏表紙にアドレスがありますので、ご連絡下さい。